

## 伝統文化とグローバルな観光現象のせめぎあい ～みやげものを巡る政治・文化・ものがたり～

### 【実施日時、場所】

2017年2月11日(土)12:50～19:00

京都大学稲盛財団記念館213

参加者:18名

### 【プログラム】

#### セッション1 国家政策とみやげもの

八塚 春名 (日本大学)

「救荒食から『特産品』へー滋賀県高島市の地域振興政策とトチ餅づくりの変遷」

高山 陽子 (亜細亜大学)

「政治的な記憶の商品化:中国の革命観光」

#### セッション2 民族文化とみやげもの

呂 怡屏 (総合研究大学院大学)

「文化復興における手工芸ー台湾小林村の刺繍」

中村 香子 (京都大学)

「民族アイデンティティを加工して売る:ケニア・サンブルのビーズ装飾」

#### セッション3 地域ブランドとみやげもの

山口 睦 (東北大学)

「復興支援とみやげもの:東日本大震災被災地における手作り商品」

風戸 真理 (北星学園大学)

「モンゴル国の羊毛フェルトをめぐる手作り・機械化・おみやげ化」

コメンテーター 橋本 和也 (京都文教大学)

田中 雅一 (京都大学)

神田 孝治 (和歌山大学)

### 【開催報告】

本共同研究は、世界各地のみやげものとそれらを取りまく社会的な状況を比較し、みやげものに込められた多様な価値の源泉と、それらが観光の文脈においてどのように変容し、せめぎあってきたのかを検討することを目的としている。

セッション1では、国家や自治体の政策がみやげものとしてどのように表出するのかを明らかにした。セッション2では、観光の場において民族文化が利用されるプロセスや動機について議論した。セッション3では、商品が手仕事によって製作され、かつ産地や生産者グループがある意味での地域ブランドをなす萌芽的な場としてのみやげものの生成に注目した。

以上の議論を踏まえて、コメントとして多く寄せられたのは、みやげものが土地固有の産物である、地域社会や文化と密接に関連しているという在り方への疑問である。みやげものの真正性と置きかえられる「地域特有の何か」という特性から離れ、モノや人のモビリティ、流通ネットワークなどとの関連性においてみやげものを分析するパースペクティブが求められるだろうと指摘された。

発表者らの専門分野である文化人類学におけるモノ研究の高まりを背景に、観光学におけるみやげもの研究の発展に寄与できる可能性が提示できたといえる。コメンテーターである橋本氏、神田氏らが主催する観光学術学会とのつながりも形成され、2018年2月にみやげものをテーマにした観光学術学会研究集会において八塚、山口が発表予定である。